

## 芥川だより

発行日\*\*\*2019年7月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

梵

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## 3年要した飲み屋のツケ

四条通りから先斗町の路地を北へ少し歩いたところにその店はあった。英語で書かれた店名の黒い扉が、いかにも高い店だというように威圧感を感じさせる雰囲気を持っていた。ママ曰く先斗町では名の知れた古い店だと自慢していた。

30歳になったばかりでフラフラしていた時にある人に紹介されて通うようになった。ママは一時期アメリカで暮らしていたとかで、ハーフと思える娘も手伝っていた。バーテンダーが二人、ホステスが3人ぐらいた。店は細長く鴨川に

高床を出していた。夏場は鴨川を見ながら高床の座敷で飲むようになっている。

ママは非常に気丈な人で生命保険会社に勤めながら女手一人で娘を育てたらしい。その時に作った人脈を利用して店を開いた。その主な人脈は市役所の人達であったようだ。ある時。中年の客に「よく見かけるが、あんたみたいに若い人がどうしてこんな店に来られるのか？」と言われたことがある。お堅い公務員の中老年が通う自慢の店だったのである。

バカな私は、知り合いたちを自慢げによく店に連れて行った。そうこうしているうちに金が払えなくなったが、ママに「ツケで飲ませるのはあんただけよ」とおだてられ、さらに調子に乗って通うようになった。とうとう生活費にも困るようになって飲み歩きが出来なくなった頃、ママから「久しくお店に来ないわね。お元気ですか？飲み代がだいぶたまっているので少しずついいから払ってね」と催促の電話が来た。

生活費もない状態だからツケを払う余裕はなかったのだが、月末になれば必ずママから催促の電話があるので家内に泣きついて払い続けた。3年もかかってようやく借金を払った数年後、飲み会の流れで店に行くと友達の前で私に、「今日はツケ無し、現金やで」と念押しされ腹が立ったが、よくよく考えれば私が悪い。ママが商売上手でしっかり者だったのだ。しかし、数年前に寄る年波には勝てず閉店したと聞いた。

死をめぐるあれやこれ (57) 石川 吾郎

映画「新聞記者」と参院選

本格的な政治批判をした映画として話題になった、この映画。主人公は内閣情報調査室に勤務するエリート官僚と政府に批判的な女性新聞記者。「この国の民主主義は形だけいいんだ」という主人公の上司のせりふも飛び出す。

現実起こった事件を現在進行形でちりばめ、加計学園問題を思わせる大学新設にまつわる巨悪をリークする官僚と、政治圧力に抗してそれを報道する新聞記者の苦悩。

この映画が参議院選挙の前に封切られたことには大きな拍手を送りたい。松坂桃李というスター俳優が演じる映画にもかかわらず、TVメディアなどが全く伝えない現実にも大きな関心を感じてしまう。しかしそれにも関わらず、週日午前の映画館には、大勢の観客が詰めかけているのが印象的だ。ぜひこの映画を多くの人に見てもらいたい。

そして参院選には、ぜひ投票に行きたい。今回の参院選だけでは、安倍内閣を倒すことは困難だけれど、このまま改憲勢力が議席の三分の二を占めるようなことになれば、安倍政権は、間違いなく改憲に乗り出す。改憲は恐らく九条だけではすまない。災害のためとの口実で、緊急事態条項を入れる可能性が高い。これは「緊急事態」と称して、国会の機能を停止し内閣が法律を勝手に作ってしまうもので、かつてナチスが行った手法。この改憲によって、独裁政治への道を開き、戦前の日本へ逆戻りが現実のものとなる。

民主的な選挙も今回が最後になる可能性さえ考えられる。安倍政権にNOを！

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 57	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 64	坂本一光	2
哲学翁いの時事放談 14	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 25	下村嘉明	4
大人の今昔物語 58	石川吾郎	5
B級サラリーマン渡世譚 72	明石幸次郎	6
オクラの山たより 34	因了生	8
隠された歴史 9	満田正賢	14
道を行く(3) 山辺の道(3)	成瀬和之	16
我がおくのほそ道の旅 その	成瀬和之	17
後2 金福寺と芭蕉・蕪村		
編集後記	嘉	17
ふみの道草 (13)	山椒魚	18
俳句	土田裕 影山武司	18

芥川だより一五〇号

目次 ページ

素老人☆よもだ帳 (64)

坂本一光

◆本当の幸せ

去る六月二十三日、今年も沖縄全戦没者追悼式が行われた。玉城デニー知事は「平和宣言」の中で沖縄戦終結からの七十四年を振り返り、「人間が人間でなくなる戦争は、二度と起こしてはならないと、決意を新たに」した。そのうえで、「沖縄県には、戦後七十四年を経過してもなお、日本の国土面積の約0.9パーセントに、

約70.3パーセントの米軍専用施設が集中しています。広大な米軍基地は、今や沖縄の発展可能性をフリーズさせていると言わざるを得ません」と述べた。そして続けた、「国民の皆様には、米軍基地の問題は、沖縄だけの問題ではなく、我が国の外交や安全保障、人権、環境保護など日本国民全体が自ら当事者であるとの認識を持つていただきたいと願っています」と。

さらに今年二月、辺野古埋め立ての賛否を問う県民投票が実施され、圧倒的多数の県民が辺野古埋め立てに反対していることが明確に示されたと指摘して、「工事を強行する政府の対応は、民主主義の正統な手続きを経て導き出された民意を尊重せず、なおかつ地方自治をも蔑（ないがし）ろにするもの」であると批判した。知事はまた、「全ての人の尊厳を守り誰一人取り残すことのない多様性と寛容性にあふれる平和な社会を実現するため、全身全霊で取り組んでいく決意」を宣言した。

追悼式で朗読された「平和の詩」は知事のこの宣言と対をなし、県民の心に寄り添ったものであった。本当の幸せが実現する新しい時代を、素老人も願ってやまない。以下は詩の全文である。

本当の幸せ

糸満市立兼城小学校六年

山内玲奈

青くきれいな海

この海は

どんな景色を見たのだろうか

爆弾が何発も打ち込まれ

ほのおで包まれた町

そんな沖縄を見たのではないだろうか

か

緑あふれる大地

この大地は

どんな声を聞いたのだろうか

けたたましい爆音

泣き叫ぶ幼子

兵士の声や銃声が入り乱れた戦場

そんな沖縄を聞いたのだろうか

青く澄みわたる空

この空は

どんなことを思ったのだろうか

緑が消え町が消え希望の光を失った

島

体が震え心も震えた

いくつもの尊い命が奪われたことを

知り

そんな沖縄に涙したのだろうか

平成時代

私はこの世に生まれた

青くきれいな海

緑あふれる大地

青く澄みわたる空しか知らない私

海や大地や空が七十四年前  
何を見て

何を聞き

何を思ったのか

知らない世代が増えていく

体験したことはなくとも

戦争の悲しさを

決して繰り返してはいけないことを

伝え継いでいくことは

今に生きる私たちの使命だ

二度と悲しい涙を流さないために

この島がこの国がこの世界が

幸せであるように

お金持ちになることや

有名になることが

幸せではない

家族と友達と笑い合える毎日こそが

本当の幸せだ

未来に夢を持つことこそが

最高の幸せだ

「命どう宝」

生きていくから笑い合える

生きていくから未来がある

令和時代

明日への希望を願う新しい時代が

始まった

この幸せをいつまでも

(かたちは心であり、心はかたちになる

「国体を哲学する」

先月号では、「令和の時代」は「象徴天皇制」の矛盾のはじまりということを終えた。もともと「象徴」といふものが「何を示す」のかわからないというところから始まっているからであった。日本国憲法には「天皇は日本国民の統合の象徴」と書いてあるが、その「象徴」も「何に統合されるのか」もよくわからない。日本国籍があり、そして諸法規を守っているだけでは「日本国民」ではないのかという疑問である。さらに、現在の「象徴天皇」自体、その「象徴」そのものが「お言葉」を發したり、「行動」したりして「変化」している。「象徴」は固定化して動かないから「基準」になるもののはずである。「平和の象徴」の「鳩」が「鷲」に変わっては混乱する。今月は引き続き「令和の時代」を哲学する。それは「時間と空間」支配から、さらに「精神」の、すなわち心の支配原理の哲学でもある。

(1) 「天皇制」は「制度」ではない？

さて、「天皇は「戦前」の大日本帝国憲法であり、「戦後」の日本国憲法であり、「法」として規定されているには変わりはない。ところが、この明白な事実を

否定する人々がいる。「天皇は制度によっているものでもなく、機構に属しているものでもありません。我が日本の「国体」そのものであります。ゆえに「天皇制」という呼称は事実即していない間違いであります。しかし、保守の振りをした転向者は、この「天皇制」は使うことは間違いないと言います。決して惑わされることないように注意したい。」と。惑わしているのは神国日本を貶めるための「コミンテルン」の陰謀であるという。ここで事実目をつむり、「そうか」と思うか「おかしいな」と思うかが分かる人が出てくるが、これは、自分たちに有利な客観的理由を見つけ出せないために偽の外因を捏造する、例の「陰謀説」の効力のお陰である。この「事実を見ない」「事実目をつむむ」という態度が、「歴史修正主義」と呼ばれる昨今の時流である。

しかし、かれらのいうのも一理ある。

神国島国日本が外庄によって「近代国家」になったのは、なるほど「明治」からであり、力の強いものが権力を持つという国の構造であった。しかし近代国家はそうではない。国家を代表するものは「力」でなく「法」によって制限されなければならぬ。なぜなら、「力」は目に見えないし、流動的であり、変化し、不安定である。そんな「不安定な国」との交流は

できない。さらにまた、構成員である国民の意思が反映されていないのも不安定の要因になる。近代国家概念を作ったとされるイギリスの哲学者ホブズは、自然状態では、諸個人は自然権を有していたが、自然法が機能しなかったため、万人の万人に対する闘争状態が生じていたと仮定する。その上で、この闘争状態を克服するためにやむを得ず、諸個人が自然的理性の発現をさせて、自然状態を有していた自然権を放棄して社会契約を締結し、その契約に基づき発生した「主権」によって国家が成立したとみる。これが「近代主権国家」の概念である。「社会契約」は「法」といなり「明文化」される。

この「法」という制度が安定をもたらすというのが近代国家である。しかし、それでもなお、その「闘争状態」の心配は消えないと考える人々が出てくる。もちろん、そのときには「契約内容」を変更すればよいのであるがそれに同意できない人々の不満が残る。その心配は「心情的」なものである。なぜなら「心情的」なものは「明文化」が不可能であるからである。

さて、「天皇は制度ではない」という人々が言っているのはこのこと、すなわち「天皇は心情的なもの」であるということをお願いするのであろう。多分、では天皇とはなにかというと、それは「日本の国体」であると先の文中でかれらは明

言している。大日本帝国憲法4条でさえも「天皇は元首である」と明記されているが、そうではなく「国体」であるという。

(2) 日本的近代原理の一つとしての「国体」概念

本来、「近代国家」であろうとする明治維新には「力による將軍」ではなく「立憲君主」として明文化するための「天皇」は必要であったかもしれないが、どうしてさらに、心情的天皇である「国体」概念が必要であったのか。それはよく言われることであるが「制度」を補完する役割としての「宗教」の必要性である。西欧の「キリスト教」に代わる日本の宗教として「神道」が復活せざる理由である。「神」の前にある「平等な個人」や「契約としての法」そして「自由」という近代社会概念を作り出した「普遍的キリスト教」に対抗するためには「特殊性」を際立たせることにしかその「根拠理由」を見つけ出されない。すなわち「神国思想」という「対外的原理」である。そして「対内的原理」すなわち、国内に対してはその正統性をしめすために「万世一系」を創り出し、個人の「精神的原理」としてもちだされたのが「国体」概念である。この三つの原理で近代日本はスタートしたのである。

(3)「象徴」を支える、今も変わらぬ「国体」

天皇に関する「国体」ということば自体は、現代ではほとんどなじみのない言葉となっており、若者は「国民体育大会」ということしか連想できない。では「国体思想」は消滅したのであるか。否、反対である。それは逆に「体に染み付いた」のである。物事があまりにも身近に自然になりなると、それが「外から入ってきたもの」とは気づかなくなる。

そもそも「国体」というのは、これまた「嫌中」者たちの敵国、中国の漢籍から来ている。「国体」は「国を組織する骨子」や「国を支える器」の意味で用いられている。古代日本では「国体」と書いて「クニカタ」と読む言葉があり「国の様子」を意味していたらしい。その源の中国では「国体」の主体である「皇帝」は「徳の政治」をしなければ「天命」により交代の必然があつて、国家が分立交代したが、日本にあつては「神」によって万世一系が保証され国の基本は変わらなかつたとし、「国体」を安定統治の不可欠要素とするようになった。

世界的規模での近代化の波のなかで、対外的国家観の意味で「国体」の語が用いられるようになったのは江戸後期以降である。対外的原理としての「尊皇攘夷」を述べた「水戸学」の「新論」で会沢正志齋は「国体」概念を対外的国家の正統

性の精神的原理と説いた。これが明治維新の原動力となる。先に見たように「明治憲法」はあくまでも「成文法」であるから、精神的原理の「国体」は表に現れずに底流に流れ込む。しかし、西欧列国に対しての、対外的正統原理が再び必要となる昭和期の日中、大東亜戦争になると「天皇が統治する政体」を意味する所の「国体」思想が再び表に現れ出てきた。

そして敗戦。「戦後」の時代に入る。さすがにこの「国体思想」は変更されるのかと思いきや、驚くことに、新「日本国憲法」制定の憲法審議において、親米派となつた吉田茂は『日本国は民主主義であり、デモクラシーそのものであり、あえて君権政治とか、あるいは圧制政治の国体でなかつたことは明瞭であります。』と言つた。この理屈はどこから来るのかと考えてみると、そこに「国体」という思想の特殊性がある。「国体」概念とは、先にも見たように文字通り「国が身体そのものである」。自分の右手が左手を痛めつけることがあるのか。一人一人の国民は日本という「体」を構成する一部であり、全体が「国体」であり、それが「天皇」の実体であるということである。つづけて吉田茂は言う『民の心を心とせられることが日本の国体であります。故に民主政治は新憲法によって初めて創立せられたのではなくして、従来国そのものにあつた事柄を単に再び違つた文字で表

したに過ぎないものであります。』と。こうしてみると、「近代日本」は「対外的原理」として「天皇制」を採用し「立憲君主国」になつたが、大東亜戦争敗戦後の「戦後」は、同じ「立憲君主国」のまま「神聖天皇」を「象徴天皇制」に変えただけである。もちろん日本国憲法前文には「主権が国民に存する」と書いてあるが。

「象徴」というものは「ハト」にせよ「トラ」にせよ、シンボルである限り何かを「媒介」にしなければ「そのもの」とは繋がらない。しかし、「国体」はそのような何を意味しているのか分からないものは不要であり、「直接的」である。なにせ私たちの「身体」であるからだ。

日本の歴史を鑑みと、「明治維新」にしろ「配線」にしろ、「対外的原理」が必要になり見直されるのは、常にその存在が脅かされているときであつたことを思い浮かべるときである。「敗戦」で「神聖」は否定されたが、「象徴」として生き残つた。果たしてこの対外的原理はうまく機能しているのか。さらにその「対外的原理」とバランスをとる「対内的原理」である「国体」との整合性が合理的に説明されているのか。そんな時に「国体は今も揺るぎないがある」と言われると不安になるのは爺だけであろうか。われわれはすでに「自主的」に作り出す、生み出すという能力を喪失し、「依存体質」にな

つてしまつたのであろうか。

現代日本が「令和の時代」に入つたとして、それは「希望の時代」であるのか。「少子化」「格差」「年金問題」など「内的不安要素」からくる政治的「対外的原理」の揺らぎは再び「時代」のターニングポイントになる可能性がある。次回はさらに哲学しよう。

## 大峯奥駈道 25

下村 嘉明

行仙宿小屋で思わぬビールにありつけた私は、酔いに任せて小屋番とも思える人にあれこれと小屋のいきさつを聞く。こんな立派な小屋をどうして立てたのか？誰が建てたのか？いくらぐらい費用がかつたのか？疑問が尽きないから、こまごまと聞く。すると丁寧に答えて頂いた。

聞けば聞くほど凄惨な小屋だと思つた。山小屋の維持管理は大変である。もうなくなつたが私の属する山岳会も湖西の山に小屋を持つていた。利用者は会員しか利用できない小屋であつた為に利用回数も少なく管理が難しかった。行仙宿小屋は、水場も遠く林道からも遠い。維持管理が大変だろうと思つた。

室内に置かれた取水日時が書かれたポリ容器がいくつも棚にきれいに並べてある。必要な人は自由に使えるようにしてある。非常食糧も見えるところに置いてある。しかも、この小屋には鍵がない。誰でも自由に入って好きにできる。

これまで色々な小屋に泊まったが、こんな小屋は初めてである。人の善意を信じて運営している。いくら山の上でも泥棒や勝手気ままな人はいるにちがいないが、だれにでも予約なしで自由に使用してもらっても構いませんという度量の深さを感じた。こんな小屋を建てるのはよほどの金持ちか、道楽者かと考えた。

しかし、そんな事ではないと話を聞きながら理解してわが身を恥じた。

昔、行者でもあった前田勇一さんが廃れていた大峯南奥駈道の再興を願って登山グループを作り熱心に活動されていたが病に倒れグループも解散した。しかし、交流のあった「新宮山彦ぐるーぷ」が後を継いで奥駈道の整備や新たな小屋の建設をされてきたと説明を受けた。

前田さんもちい人だが、その夢を引き継いだ「新宮山彦ぐるーぷ」の人たちもすごい。山道に生い茂るスズ笹を刈りつづけるだけでも無限とも思える労力がある。毎年の雪や台風などで道は荒れる。小屋の維持管理も…。考えても気の遠くなるような事ばかりである。

私だったら、一億の金を積まれてもやる気は起きない。多分大方の人は考えも

しない事だろう。それを実行するとは、言語に絶する。リーダーもすごい人だっただろうが、それを支えて協力する人たちも多くいたということだから、新宮という地域の風土に興味を感じた。

知り合いの紀州人に聞くと、新宮の人は、プライドがあつて賢いと即座に答えた。その返答を聞いて、私は何となく納得したのである。不思議な出会いに感謝しつつ腹の底から沸々と嬉しさが込み上げてきた。

古代史を調べれば、神武天皇が降臨した古代遺跡もある。また、熊野三山など信仰の聖地ともいえる地域である。

「新宮山彦ぐるーぷ」のホームページには次のように書かれている。

「新宮山彦ぐるーぷ」は、昭和49年（西暦1974年）4月28日に発足した。「山を歩いて自然に親しみ、体験を通してモノを考えよう」というし趣旨で「入会金、会費、会則ナシ」（但し、山行、行事毎に必要な経費を徴収し作業は無料を建前）これらの参加は自主的で、以来活動を継続して現在に至っている。

昭和59年（1984年）から従来の登山一辺倒より、奥駈葉衣会を創設し主幹して亡くなられた前田勇一翁の遺志である「さびれた大峯・南奥駈の道をよみがえらせ、日本古来の精神文明を見直そう」に共鳴して、荒れ果てて通行不能となっていた南奥駈道（太古の辻）熊野本

宮（45km）の刈拓きを、修験行者の千日回峰行になぞらえて「千日刈峰行」と銘打ち、三カ年、47名が24回の出勤（延315日）で貫通した。

スズタケを主とした竹の繁殖力は旺盛で、一巡した刈後にはこれらの芽が吹きだしており、二巡目として足かけ二年、40名が延174日で再整備したものである。

「道が良くなったが、玉置神社から持経宿は遠すぎて一日行程では歩けない」と言うこととなり、これでは前田翁の遺志は顕現出来ず、安全安心して歩いて頂くため万難を克服して、佐田ノ辻（十津川村と下北山村の境界）に行仙宿小屋を敷地造成の上、皆様に浄財を募り建築（平成2年6月完成）し、併せて倒壊寸前の

平治宿小屋も翌平成3年（1991）に改築し、持経宿、平治宿、行仙宿の山小屋を管理することとなり、従来の山行オンリーから軸足をこれら3棟の山小屋及び南奥駈道の補修・維持管理の奉仕活動が主な活動になっていきます。

私は、世の中捨てたもんじゃいなあと感激した。私の知らないだけで、広い世界には素晴らしい事を営々とされている人がおられるのだと思った。それにしても「新宮山彦ぐるーぷ」は凄い会だ。

## 大人の今昔物語（58）

石川 吾郎

今回は、恋人との逢瀬に使ったお堂で、妖怪によって女が取り殺される話です。教科書に出ない度は三ノ五。

正親（おおきみ）の大夫・某、若い時に鬼に出会う話し（巻二七・第十六）

今は昔、正親司（皇族の諸事を司る役所）の長官・某という者がいた。これが若い時に、ある所に宮仕えをしている女と契りを結んで、しばしば逢い引きを重ねていたが、あるときしばらく間遠になっていた。

そんなとき、ふと「今宵、あの人に会おうと思う」と仲介の女に伝えると、その女「お呼びすることは簡単でございますが、今夜は、この家には年来の田舎の知人が参り泊まる予定になっておりまして、お迎えすべき宿がございませぬのが心苦しゅうございます」と言う。

「ウソを言っているのではないか」と疑い、近くに寄ってみると、本当に馬や下人たちが小さな家にがやがやいるので、隠れる場所もなく、それがウソではないことがわかった。この女はしばらく考えを巡らす様子で、「いいアイデアがありません」という。「何ですか」と問うと、女「この西の方角に、人の居ないお堂がござい

ます。今夜はそのお堂にお越しく下さい。」  
と言いおいて、距離は近いので、その女は小走りに相手の女を呼びにいった。  
しばらく待つうちに、当の女を連れてきた。「さあ、おいでください」と、共に出掛けていく。西の方向に一町ばかり行くと、一つの古びたお堂がある。女はそのお堂の戸を引き開けて、そこまで持たせてきた自分の家の畳一枚をそこに敷き、あとは任せ、「次は夜明け前に参りましょう」と言い置いて、その女は帰っていった。

こんなわけで正親の大夫、くだんの女と添い寝をして、寝物語をするうちに、ふと気が付くと、互いの従者は誰もおらず、ただ自分たち二人だけになっていた。しかも他に人気がない旧いお堂とくれば、何とはなしに薄気味悪く、夜も更けてくるとともに、何とも分からぬ光がお堂の後ろの方角から現れてきた。人が住んでいたのかと思っっているうちに、一人の少女の従者が火を灯したのを持ってきて、仏壇とおぼしいところに据えた。

正親の大夫、「これは大変にことになった」と、当惑している間に、後ろのほうからひとりの女房がでてきた。  
これを見て恐怖に襲われ、いったい何が起ころのかと驚き怪しみ、起き上がり注視していると、女房は。一間ばかり離れた横を向いて座っている。

しばらく間があり、女房が言う「ここに居られるのは、どなたがお入りになっておられるのでしょうか。まことにけしからぬこと。この主人は私でございませぬ。その主に断りなくこのように上がってこられるのは、けしからぬこと。昔からここには人がやってきて、宿泊するということはありません。」このように言う女房の様子は、まことに恐ろしい。

正親の大夫の言うに「自分は、人のお住まいのところとは全く存じあげませんでした。たださる人がここに今宵一夜泊まされる場所があると言うのを聞き、来させていたただいただけ。まことに申し訳ございませんぬ」

女房「さつきと出て行つてくださいませ。さもなぐばためになりませぬ」と。  
正親、これを聞き、女を連れて出ようとするが、女は恐怖で汗みずくになり、立てずにいるのを、無理やりひっぱり連れ出していく。女は歩むことができないので、肩に背負いながら行く。女の仕えている屋敷までようやくの思いでたどり着き、門を叩き、女を戻して、自分も自宅に帰った。

このことを思い出すにつけ、髪の毛も太る思いで、気分も悪い状態が回復せず、次の日にも終日臥せていたが、夕方になった。昨夜、女が立ちあがることのできない状態だったのが気になって、仲介

をした女の家に出かけて尋ねてみると、曰く「その方は、お帰りになってから、ただただ弱って瀕死の状態のごようす。「何があつた」と周囲から尋ねられてもお答えできる状態でないの、主人も驚き、後ろ立ても居ない女なので、仮の小屋を作り、そこに移されたのですが、そこで間もなくお亡くなりになりました」これをきいて正親、非常に驚き「昨夜、これこれのことがあつたのです。鬼の住むところに人を寝かせてしまったのです。なんと自分はひどい人間なのでしょう。」これを聞いた女、それはそんな処だとは知らずにしたこと、と慰めるが、もうあとの祭りであつた。

この話は、正親の大夫が後年になつて語つたことを語り伝えたものだろうと思われ。

このお堂は、いまだに存在しているという。七条大宮のあたりにあると聞いているが、詳細は不明ということだ。  
こういつたわけなので、人が住まない古いお堂などには宿つてはいけない、と語り伝えているという。

#### 《コメント》

廢屋での逢い引きに、女が妖怪によつて取り殺されるという、全体の筋立ては『源氏物語』の夕顔の巻を連想させます。注目すべきは、正親の相手の女の言葉は一言もなく、ただただ死んでいく弱い存在として描かれています。この点も夕顔

に似ています。

この当時の畳はどうもポータブルだったようです。板の間が基本で、位の高い人の寝る場所にだけ畳を敷いていたようです。

表題には「鬼」と表記されていますが、ここに出てくる「妖怪」は、おそろしい姿形をした妖怪ではなく、普通の女房であることにも注目してよいと思います。

個人的には、これのように京都の地名が記された話には、俄然興味を掻き立てられます。平安京の昔にこの辺りで、こんな話しが繰り広げられていたのだと想像するのは、二十一世紀の今でも楽しいことです。

### B級サラーマン渡世譚(72)

韓国編(担当者の役割) 25)  
明石 幸次郎

明石は、向かいに座っている酒豪の2人に時々、銚子を持って、酒をすすめた。二人の会話は、H川の下にいる入社3年目の若手社員T君の話になり、どうもH川はT君の扱い、接し方が分からず、困っている様であった。

「K田さん、T君の様な最近の新人類の扱いは、程ほど分かりませぬわ。今日も工場の人と又ケンカするわ、関係商社と

は、納期のこと、揉めて、ペナルティを取られそうになったので、慌ててM利君が何とか間に入って話をつけたようで、簡単な仕事でも彼には任せられませんか。どうも仕事は自分のやり方、自分の考えが正しいと思い込んで、自己主張するだけで、相手の言い分に耳を貸さないですね」と言いながら、ぐいと上手そうに酒を飲みながら、

「まあ、彼は、自分を中心に世の中が回っているよう言い方ですわ。私から幾らおかしいところを指摘しても、中々、理解しなく、接点が見つかりません。ほんまに、ウチの嫁はんと話をするより、難しいですわ。K田さん！これには、あの温厚な、元商社マンの指導員のM利君も流石に手を焼いて、扱い方、指導の仕方に苦労してますわ」と言つと、K田は「まあ、新人類と言つて、扱いが難しいと旧人類の我々が言うのは、いつの時代もそう言う言い方は変わらないと言われている。どうも私が見るところ、T君は地味で真面目そんなM利よりもK村の派手な仕事のスタイルを外見だけを見て、真似しようとしているのではないかなあ？ 若い社員はK村君の、押し出しの強さ、スタイルの恰好の良さに憧れるのかも知れんが、K村はああ見えても、相手を見て、落しどころを考え、やり方、言い方などを変えて、最後は何か話を纏めて、注文を取って来ている」と言いながら、「まあ、中々の役者やで！若い社員が彼の外

見だけを見て、中味を見ずして、彼を真似をしたら、火傷をするで！はっはっはー」と笑いながら言つて、H川の注いだ酒を飲みながら「そうか、3年も経てば、仕事は、自分のためにあるわけではないし、世間とか、会社がその仕事のあり方を要求する、と言つことをわからないと駄目やなあ！ 要求されたら、それに合わせるか、合わなければ、どう折り合いをつけて、自分を曲げてでもあり方を変えていかないと、仕事は上手くいかないもので！ 曲げて損するものではないし、そうやつて、我々、会社勤めの者は、会社からお金を貰つている。それを分らないとなあ」と言いながら、お猪口の酒を一気に飲み干した。

それから「一体、曲げられへん自分と言つのは何者やねん！ 自分探しは仕事の上でやり、与えられた仕事の中で探して行つたら良いのや。別に、魂とか信仰心を曲げると、会社も、世間もそこまで要求しているわけではない。他者との折り合いをつけて、それに合わせるくらいのは芝居を打てなかつたら、大人ではない。まだ、母親に保護されている、子供やなあ」と言つた。

H川は少し熱を入れて「K田さん、そこが彼は分かかってないんですよ。この前も、M利君と3人で飲みに行つて話をしたのは、例のインドネシア向けの引き合の件です。赤字になる安い価格で、しかも特別仕様で、その上に短納期の案件

を彼は、どうしても受注したいということ、工場と打ち合わせを何回かしました。技術的に、コスト的にも、決してや納期も無理があると言つて、輸出部の方針として断ると言う結論になりましたね。彼は、それが気に入らないと、へそを曲げて、2日ほど会社を無断で休んでしまいましたでしょう。それへの反省を求めたら、酒を飲んだ勢いもあつたのか、逆ざれされてしまい、自分が熱心に

事業の将来を考えた上で、多少の赤字でも注文を取り、市場に食い込み実績をつける戦略を取らないと、Y社に負けてしまい、今後幾ら頑張つても、我社はその市場には参入出来ない」と改めて言い張つて、本来は自分をサポートしてくれる立場の二人が自分の足を引つ張る。もうそんな、上司とは仕事は出来ないの、転勤させてくれ。そうでなければ、会社を辞めるとまで言つて、店で大騒ぎになつてしまいました。二人で宥めて、何とか外に連れ出しましたわ。それから、タクシーに乗せて、M利君が寮まで送り

ましたが、タクシーの中でも喚き通して、M利君が大変やつたみたいでした。その上、翌日は会社を欠勤しました。優秀な大学を出た貴重な人材をと言つて輸出部に配属してもらい、幹部育成と言つて1年目は富士山の近くにある、貿易研修センターに1年コースの研修に出しましたわね。大変な経費を会社として彼に投資をしますわ。そうそう、後から

来る「T田君等も1期生として、そこに派遣しましたね。あれからもう2年ですよ。今では戦力どころか、M利も私も彼には程ほど、彼の扱いに疲れてますわ。こんな事を言つていたら、管理職失格ですかね」と言つてお猪口の酒をぐいと飲み干して「そうだ、明石さんは、入社何年目？うちにいるT君とは話をしたことがあるなあ？」と問われたので、

「入社して7年目です。まだ、輸出部に異動して、一週間も経っていませんので、Tさんとは、話をしていませんが、電話で大きな声でやり取りをしていて、勢いのある元氣そうな社員という印象は持ってますがー」と答えるとH川が「君はK村君とは同じ課だから、色々と話してはしているの？」と問われたので「直接、仕事は一緒にしてませんが、昼飯に誘われたり、この前の歓迎会の時は、お前、今度、韓国を担当して、出張するんやろ。それなら、H川さんに挨拶をして、酒を注いで色々教えて貰えということ、言われました」と言つと「そうか、それで君は俺の席まで来て酒を注いでくれたのか！ はっはっはっ。まあ、それは、それで良いのだよ」と言われた。

K田部長は「仕事は学歴、大学の名前でするものでない。それを看板でやろうと思えば国家公務員の上級職になればいいんや。民間企業に入つて来ては駄目や！ そうか、彼の良い処もあると思つて、もつと色々経験させれば良いかと思つて

いたのだが……。変わらないか！頭を下げて、人に教えを請うと言う事は、学校で教えないのか？これは、家庭の教育か？」と言い出した。

K田部長自ら仕事の話は止めようと言いながらも、どうしても酒の席での話題は仕事に関連する人の話しになってしまふものだと、明石は再認識して、コップに残っていたビールを飲み干した。

## オクラの山たより (34)

困了生

一

征夷大將軍副將軍從五位下陸奥介である小野永見が亡くなったのはおそろく九世紀の初め、まだ桓武天皇が生きていた頃のことと思われます。文武両道に秀でた人であったと思われませんが、残念なことに彼の事績を物語る史料は何もありません。

その子である小野岑守が始めて史料(「公卿補任」)に現われるのは八〇三(延暦二二)年です。この年の四月に二十六歳となっていた岑守は太政官の権少外記(從七位下の位階に相当し太政官からの行政的な命令書などの作成を行う)に任じられています。四位クラスの貴族であ

った石根、竹良といった父祖の地位が考慮され陰位の制度が適用されたのでしよう。

陰位の制度とは一代限りの官僚の特権と違い子孫まで恵まれるように考慮された貴族の特権です。つまり、五位以上の貴族の子孫に限って父祖と同じ地位に昇りやすい装置をつくっていたのです。たとえ凡庸な息子でも仕官の際には最初から高い地位が与えられました。たとえは、一位の息子は從五位下の位階が与えられるという具合です。

その後、岑守は順調に昇進して八〇六(大同元)年、東宮少進(從六位下の位階に相当)に任じられました。その三年後には從五位下と昇進して貴族の一員となつていきます。たった六年で一氣に八段階の昇進をしたことになりました。この間に起きた大きな出来事は「薬子の乱」ですが、岑守は非常事態に際して不破の関を閉めるという「固関(こげん)」の任を果たしています。それがあつても異例の昇進です。何かある、と考えるのは決してグスの勘ぐりではないでしょう。

実をいうと筆者には一人だけ心当たりがあります。それも女性です。その名前は後で明かすとして、その前に小野一族の女性を何人か紹介しようと思います。

小野一族の女性で有名なのはなんといっても小野小町ですが、他の女性となると彼女らの名前はおろか、その父親の名

前や結婚した相手の名前すらほとんど伝わりません。その中で筆者が見る限りかろうじて小野小町以外に五人の女性の名前が史料や和歌集に現われます。

まずは小野田刀自(おののたとし)。正史によると彼女は七六六(天平神護二)年、無位から從五位下に叙されたとあり、三十三年後の七九九(延暦十八)年、從五位上に昇進しました。もう一人は小野虫壳(おののむしうり)です。虫壳は七七一(宝龜二)年五月に正六位上から從五位下に叙されています。

位階を与えられているところから察するに田刀自、虫壳の二人は女官として出仕していたのでしよう。八世紀から九世紀半ばにかけて宮中に出仕する女性の多くは政府高官の妻であり単に天皇の身の御世話だけでなく官人と天皇の取り次ぎなど多くの重要な役割をはたしていました。男性以上に位階の高い女性が多かつたので、当時トップクラスのキャリアウーマンといつていいでしょう。

もう一人は小野吉子(おののよしこ)です。八四二(承和九)年に正六以上に叙せられています。一説では仁明天皇の更衣で源冷の母とされており、また一説では嵯峨天皇の更衣で源常、源明の母だともいわれています。これらの説が正しいのかどうか筆者には分かりませんが、天皇の近くに仕えていた女官であつたのは間違いないようです。この吉子が小町と同時代に見える小野氏出身で唯一の女

官であつたために小町その人だという説がかつてありました。論争はいろいろありましたが、いまだに結論は出ていません。

そして、もう一人は「古今和歌集」に一首だけ掲載された「小町の姉」という女性です。彼女の歌を紹介します。

時過ぎて かれゆく小野の  
浅茅には

今は思ひぞ たえず燃えける

「古今和歌集」(790)

(時節が過ぎて枯れていく小野の浅茅には今は野焼きの火が燃えている。私も愛された時が過ぎてあの人が離れていく今、彼を思う火だけはいつまでも燃えているのです)

小野小町の姉がどのような人であるかはまったく分かりません。ひよつとしたら小町の姉になりすまして他の誰かが詠んだ歌かもしれませんが、「古今和歌集」以外に何の史料もありませんので筆者にはお手上げです。

最後に小野石子(おののいわこ)。七四五(天平十七)年に生まれ八一六(弘仁七)年に七十一歳で亡くなっています。その名前からすると小野石根の娘である可能性が大きいと思います。この小野石子という女性がすごいのは何といつても小野妹子以来の小野一族で最高の位階である正三位を得ていることです。のちに扱う有名な小野篁でも死の直前に從三位

まで至りましたが、石子には一步及びま  
せんでした。石子が出仕したのは同族の  
小野田刀自、虫売の二人と同じ時期だろ  
うと思われま。とすれば石子は称徳・  
光仁・桓武・平城・嵯峨という歴代の天  
皇に仕えたことになりま。なかでも嵯  
峨天皇の寵愛ぶりは尋常ではなく偏愛と  
いつてもいいほどであつたといいま。

小野石子が異例の昇進を遂げたのは、嵯  
峨天皇が典侍であつた彼女を寵愛し重く  
用いたためでしょう。嵯峨天皇の寵愛ぶ  
りを示すエピソードがあります。

京都市西京区大原野（洛西ニュータウ  
ンの南です）の市街地の中に喜春庵とい  
うあまり目立たない寺院があります。こ  
こにはかつて小野石子の邸宅があり、そ  
の跡地に喜春庵が建てられました。寺伝  
によればこの地に八一六（弘仁七）年、  
嵯峨天皇が行幸して漢詩の会を開いたと  
いうのです。天皇が親しくしている上級  
貴族の邸宅におもむくことはよくあるこ  
とでしたが、さすがに女官、それも七十  
一歳という女官の邸宅に行くということ  
はめつたにあることではありません。こ  
こから察するに漢詩文を愛した嵯峨天皇  
の小野石子への寵愛はその容色にあるの  
ではなく彼女の持つていた豊富な漢詩文  
の知識と才能であつたと考えられます。  
小野石子の死に際して嵯峨天皇はその死  
を悼む詩を送りましたが、同時に藤原冬  
嗣、桑原赤原も石子の死を悼む詩を送  
つていま。

嵯峨天皇の覚えめでたいこの小野石子  
の影響もあり小野岑守はとんとん拍子で  
昇進していったと筆者は考えるのです  
が、いかがでしょうか。もちろん彼の学  
才、詩才、そして官僚としての有能さな  
ども十分に評価されていたのでしよう。

## 二

小野岑守の人生に最も大きな影響を与  
えた天皇は嵯峨天皇（七八六〜八四二）  
です。空海らとならぶ三筆の一人として  
名高い天皇ですが、日本文学史の上では  
王朝漢詩文の時代をリードした天皇とし  
て有名です。

かつて九世紀前半の時代は国風暗黒時  
代と言われていました。「万葉集」の時代  
から「古今和歌集」へのあいだにあたり、  
これといった和歌集が見られない中で天  
皇をはじめとして貴族たちは詩宴をたび  
たび開いて漢詩を作りあいました。その  
成果は「凌雲集」「文華秀麗集」「経国集」  
という勅撰漢詩集によって見ることがで  
きます。嵯峨天皇自身の作品もその勅撰  
漢詩文集の中に入つていま。

嵯峨天皇の時期の詩人たちの作品は確  
かに後の菅原道真の作品に比して異国の  
文学を必死に真似て何とか自作のものと  
した模倣といつてもいい作品が多いので  
すが、明治の世に西洋の詩を紹介し何と  
か自国の文化に取り入れようとした人々  
以上の心意気が感じられます。よく頑張

つているじゃないか、というのが彼らの  
漢詩を読んだあとの率直な感想です。嵯  
峨天皇の作品を一つ紹介しま。

### 江辺草（淀川べりの草）

春日江辺何所好 春日の江辺、何の好き所か

ある

青青唯見王孫草 青青ただ王孫が草を見る

のみ

風光就暖芳氣新 風光暖に就きて芳氣新し  
如此年年觀者老 かくの如く年年觀る者老

ゆ

（春の日の淀川べりの見どころは何かといえ  
ば、ただ見るのはあの帰らぬ殿の若君を思わ  
せる青々とした春草ばかり。風や光は暖かく  
なり草の芳しい香りはみずみずしい。草はい  
つも新しいが、年々歳々これを見る者は、あ  
あ老いていくばかり。）

「江」は淀川のこと。嵯峨天皇は今の  
京都府大山崎の地に河陽（川＝淀川の北  
部の意）離宮を作りしばしばここで詩宴  
を開いた。「王孫草」とは「楚辞」の「王  
孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり（若  
君様が出たまま帰って来ない。今や春草が盛ん  
に茂ろうとしているのに）」に基づいていま  
す。「年年」は有名な初唐の詩人劉希夷の  
「代白頭吟」の「年年歳歳花相似たり、  
歳歳年年人同じからず」を踏まえている  
詩句。詩語、詩意ともにパクリそのもの  
ですが、異国の詩を何とか自分の感情と

同調させて自作の詩にしようとしている  
努力が見られませんでしょうか。

ここまで書いてくると嵯峨天皇は文芸  
を愛好する文学青年のような帝王像を思  
い浮かべてしまいますが、「さにはあら  
ず」です。

日本で最も多くの子をなした天皇は  
「古事記」によると日本武尊の父である  
景行天皇だそうで、なんと八十五人の子  
供がいたそうです。もちろん、これは伝  
説ですから真偽の程はまったく不明で  
す。では、嵯峨天皇はどうか。確実に分  
かつている彼の子供の数は五十人。父親  
の桓武天皇も三十四人の子供がいたとい  
いますから親譲りのエネルギーシユぶり  
といえるでしょう。

五十人もの天皇の子女が生まれれば当  
然のことですが国家財政が苦しくなりま  
す。そのため、天皇の子女に「源朝臣」  
の姓を与えて臣下に下すことが嵯峨天皇  
の御代から始まりました。五十名の子女  
の中で三十二名が「源氏」となつたとい  
いま。源融、源信などが有名です。た  
とえ支配者であつても艶福家として有名  
な江戸幕府十一代將軍徳川家斉の子供の  
数は五十三（ひよつとしたら五十五）人  
ですから、嵯峨天皇は日本の「子だくさ  
んパパ」の筆頭格といえるでしょう。  
また、政治の面でも嵯峨天皇はグズグ  
ズとした天皇ではありませんでした。彼  
の素早い情報収集と的確な決断の早さは

内乱の危機を危ういところで食い止めました。薬子の変です。薬子の変は八一〇年、嵯峨天皇の即位後すぐに起きました。前年に弟の嵯峨天皇に譲位した平城上皇が尚侍（ないしのかみ 女官のトップです）藤原薬子、その兄の藤原仲成と謀って再び天皇に返り咲こうとした事件です。嵯峨天皇側と武力衝突寸前まで行きましたが、平城上皇側の平氏逃亡が相次ぎ、薬子は自殺し仲成は射殺され平城上皇も出家して変は終息しました。平城上皇の動きが表面化してから終息に至るまでわずか五日。その果敢な動きには目をみはるものがあります。

この嵯峨天皇という漢詩文を愛し自らも日本有数の漢詩人であり、エネルギーにあふれる帝王の周辺に多くの文人（詩人）官僚が集まります。それは勅撰漢詩集に多くの作品を残している藤原冬嗣（藤原北家 藤原道長の先祖）、良岑安世（桓武天皇の子）らを中枢とする勢力でしたが、小野岑守もその有力な一員でした。彼らは嵯峨天皇の周囲に集まり天皇の出した「お題」に基づく詩や天皇の詩に唱和する詩を数多く作りました。

岑守はなかでもお気に入りだったようで、彼の詩才と学才とをめで我が国で初めて勅撰漢詩集「凌雲集」の編集、およびその序文を彼に託しています。その序文の冒頭で岑守は次のように書いています。

魏の文帝の曰く、文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり。年寿は時ありて尽き、榮樂はその身にとどまらぬ。信なるかな。

（魏の文帝がいうには、文学は国を治めるための一大事業であり、永久に朽ちることのない優れた営みである。人の寿命はいつか尽き果てるし、榮華や快樂も結局は我が身限りのことである、と。この言葉、本当にその通りであるなあ。）

この序文は文選に収められた魏の文帝（曹丕）の「典論論文」の一節をそのまま使って嵯峨天皇とそこに集う詩人官僚の思いを集う詩人官僚たちの思いを岑守が高らかに宣言したものと見えるでしょう。漢詩文の興隆こそがこの国を支え発展させていくいしずえであると。

そうした時代、いわば詩と詩人が国家の隆盛に従属するが如くに考えられていた時代にあつて本来的に詩の機能であった自己の感情の表現をめざす詩人たちはどのような思いでいたのでしょうか。

官僚として唐の玄宗皇帝にも仕えていた詩人王維は「半官半隠（半分は役人で半分は隠者）」という考えでいたらしいのですが、嵯峨天皇の時代に榮達することを目指して天皇にはべつていた者を除いて、詩人の心を濃厚に持っていた人々は「吏隠兼得」という言葉をしばしば使っ

ていました。たとえば「凌雲集」の詩人桑原腹赤や滋野貞主に次のような句があります。

登臨不外俗 登隣の俗を外にせず

吏隠両相兼 吏隠ふたつながら相兼ね

（俗とはいえ役人の暮しをおろそかにせず、役人と隠者の生活を同時に送っている。）

桑原腹赤

隱吏両相得 隱吏ふたつながら相得たり

嫌喧暫斷賓 喧を嫌いしばらく賓を断つ

（役人と隠者の生活を同時に送っている。喧噪を嫌ってしばらくは来客も断っている。）

滋野貞主

もちろん、ここには思想的にさほどの深みがあるわけでもなく、官吏としてのたまたまの間暇を得れば、それが吏隠兼得といっている単純な発想であるにすぎません。とはいえ、ここに官吏であると同時に文人・詩人であることの安らかな調和したありようを見ることができます。

小野岑守も空海に送った長大な詩の末尾近くで次のように書いています。

帰休楽閑寂 帰休して閑寂を楽しみ

在噪忘羣滓 噪にあつて羣滓（こうし）を忘る

……

寄言陵藪客 言を寄す、陵藪の客に

大隱隱朝市 大隱は朝市に隠ると。

（自分は家にさがつて休んで静かな境地を楽し

み、世の中の騒がしい中に住みながらもやましく汚らしい世間にいることを忘れてい……山や林に隠れて隠者ぶっている人に一言いいたい。真の隠者はにぎやかな街中に住んでいるものだと。）

この詩の中に赤原たちと同じ吏隠兼得の思いを感じることは容易でしょう。また、岑守の詩句には少しばかりの楽天性も見られますが、天皇にこよなく愛され輝かしい詩人であり同時にすぐれた官僚でもあり得た岑守の時代の幸福な状況であつたといえるでしょう。

「才（ざえ） 漢学・漢詩文の学識のこと」の有無よりも第一に家柄が尊ばれる詩人の才が世に出る上で何の意味も待たない撰閣政治の時代がやってくるのはもう少し後のことです。

三

さて、「凌雲集」の完成前後に岑守は陸奥国に使いとして行っています。それに際して彼をこよなく寵愛していた嵯峨天皇は彼に特別な品物（毛皮の衣服と帽子）を贈り、合わせて詩も贈っています。

吏部侍郎野美聞使辺城賜帽裘

吏部侍郎野美（小野岑守のこと） 辺城に使いするを聞き、帽裘を賜ふ

歳晚嚴冬寒最切 歳晚嚴冬 寒さ最も切なり

忠臣為国向辺城 忠臣国のために辺城に向か

ふ

貂裘暖帽宜羈旅 貂裘暖帽 羈旅によろし

特贈卿之万里行 特に贈らん卿が万里のたび

に

(年の暮れは寒さも厳しい。忠義な家来は国のために遠い陸奥の地に向かう。暖かい毛皮の衣服と帽子は寒さの中を行く旅行には重宝なもの。特に贈ろう、あなたの遙かな地への旅行に。)

この詩にこたえる作品を岑守は残していません。詩の後半のみを示します。

遠使辺城 遠く辺城に使いす

……………

明発渡頭孤月団 明発の渡頭に 孤月まどか

なり

旅客時辺愁断 旅客この時に 辺愁断つ

誰能坐識行路難 誰かよく坐して識らん 行

路の難を

唯余勅賜裘与帽 ただのこす 勅賜の裘と帽

とを

雪犯風牽不加寒 雪犯し風牽くも寒さを加え

ず

(厳冬の)夜明けころの渡し場のあたりには月が一つまるくかかっている。こうしたとき旅人となる私は辺地の辛い思いにはらわたもちぎれるようだ。すわったままでいる誰がこのような旅の苦しさを知ってくれようか。ただ天皇からいただいた皮ころも帽子がここに

ある。体の中までも雪に犯され風に身は拘束されても少しも寒くはない。ありがたい

(ことです。)

この詩には中国の辺塞詩(遠く西域の地に赴く人の気持ちをうたった詩)の雰囲気漂っています。直接に伝わってくるのは嵯峨天皇への岑守の感謝の気持ちです。こうした嵯峨天皇との信頼関係を深めた後、小野岑守は八一五(弘仁六)年、陸奥守となつて三十八年に及んだ蝦夷と戦いがやつと終わつたばかりの地へと赴いたのです。

この時代の通例として陸奥国へは家族、一族のもの、自家の使用人などを連れて下向したと考えられます。後年、伝説の人となつた岑守の子の小野篁も少年時代を父とともに都から遙か離れた多賀城で(宮城県仙台市の北部)過すことになりす。

余談ですが、岑守の前任者は佐伯耳麻呂。その第一の部下であつた陸奥権介は 大伴(後に氏姓を伴宿禰に改めた) 国道(くにみち)でした。後に応天門の変に 関わる伴善男(とものよしお) 伴の大納言の名前で有名)の父親です。この伴善男と岑守の子の小野篁は大きな関わりを持つことになりす。

#### 四

さて、小野岑守が陸奥守となつて下向した八一五(弘仁六)年にあつては地方役人のありさまはどのような状況であつ

たのでしょうか。

国全体の統治制度である律令体制はすでに奈良時代半ば以降には暗礁に乗り上げつつありました。それは中央政府にとつては財政的に危機といえる状況であり、さまざまな手直しが必要でした。

とくに桓武天皇は新都造営と蝦夷征伐のためにもそれを強力に推し進めたといつてよいでしょう。

たとえば、桓武天皇の治世二十四年間に土地調査が三回、班田(口分田の支給)は少なくとも二回行われています。しかし、この政策が地方の官人たち(国司たち、つまり、守(かみ) || 長官、介(すけ) || 次官、掾(じょう) || 三等官、目(さかん) || 四等官のこと。そして郡司も含みます)にどれほど浸透したかは後で述べるように極めて疑問でした。

そうした全国の国司、郡司などに対して七八六(延暦五)年四月に桓武天皇とその政府は「格(きやく)」を下しました。そのなかで全国の地方役人に対して農民人口の増加、勸農(農業の振興のために治水や殖産の指導など)、貢納納期(租税などを中央へ納入する時期)の厳守、治安対策の強化などを命じています。うがつた見方をすると大宝律令制定以来すでに八十年、地方役人たち(国司、郡司)の多くが律令国家の官人としての機能を弱めつつあつたことを示しているといえ

当時の記録からざつと国司のありようを見てみますと、あつと驚くほどの状況が見えてきます。

国司は中央の貴族が六年の任期で地方政治に携わる役職です。その権限はビツクリするほど大きいものでした。地方に赴任した国司たちは地方の豪族や農民を頭から侮蔑しており、さらに悪いことに彼らには強烈な出稼ぎ意識(地方に来た以上は恥も外聞もなく自分の欲望の命ずるままに動く)とする意識)がありました。

国司の特権に公廩稻(くげとう)の配分、そして任地で自分の土地をもつて経営してもよいというのがありました。公廩稻は政府の米を農民に貸し付け三割の利息を取つて政府米の欠失分の補充とし、その残りを国司たちが自分の懐に入れてしまふという制度です。また自分が所有する土地については農民たちや軍団兵を使役して開墾を推し進め、耕地を買いあさり、さらには荒れた自分の水田を農民の耕作する良田と取り替えるなどして農業経営をどんどんと拡大していったのです。もちろん開墾のための費用は不正に得た米を利用しました。

国司たちのしたことはそれだけではありませぬ。彼らの多くは赴任した先の土豪(その多くは郡司となつていました)の娘をめとつて親族となり、一族の人間となつた土豪たちの力を事あるごとに活

用しました。

ですから国司らは長くもない任期中にかなりの土地所有者になっていて、他国に転じても元の地に子息（もちろんその母は土豪の娘です）を残して農業経営にあたらせました。前国司の土着化です。こうした姿勢を身につけた国司の多くは本来の職務である治水や殖産にはほとんど目を向けず、中央から命ぜられる土地調査や班田などは自分たちの不利益になるだけです。非協力的でした。

こうした国司、いわば天皇の地方代官といつてもいいのですが、彼らは地方の人民からまるで貪欲な豺狼のように忌み嫌われていました。そのため少しでもまともな国司、勸農に熱心な国司がやってくる。「良吏」とされ当時の言葉で「良二千石」であると人民からほめたたえられたという記録が、少なからず残っています。

それと同時期、京から遠い陸奥・出羽国では土着しつつあった移民や服従した蝦夷の人々が切り開いた耕地を国司が取り上げ収公（国有地化すること。もちろん公地が増えればさまざまな理由を付けられて、その一部が国司の私有地となっていた）することが頻繁に起きていました。このため岑守が陸奥国に向かう数年前にも「人民が荒れ地を開いて良田と化しても国司が収公するため）人民散走し、静心あることなし。両国にては開田し公驗（土地所有証明書）なしといえど

も、収公（国有地として没収する）ことを得ず」という詔勅が出されています。

## 五

残念ながら陸奥守として岑守がいかなる功績を残したか、この時期の出来事を記した正史「日本後紀」が断片的にししか伝わっていないため、分かっていることはわずかです。

まず赴任して二年後に吉弥侯部等波醜（きみこべ……「等波醜」の読み方は不明。「等の俘囚」の誤りかもしれない）らを帰順させて俘囚としています。蝦夷討伐の戦争が終結したとはいえ「夷俘の性平民に異なり、朝化に従うと雖も未だ野心忘れず」といわれていた時期ですから帰順したといつても何かあればすぐに反乱を起こす危険がありました。吉弥侯部等波醜も反意を示した一人であったにちがいありません。詳しいことは分からないのですが、厳しい戦闘があったというよりも説得による帰順工作が功を奏したのでしょう。嵯峨天皇は岑守の功を称賛して次のような詔勅を出しています。

「彼（吉弥侯部等波醜ら）の野心を優げ、声教に服せしむ。懐携の権、誠にもつて嘉尚す。（かれらの野心をやわらげて朝廷の声に服従することを教えしめた。その懐柔策は誠にもつてよろこばしいことである）」

いうまでもないことですが、小野岑守は先ほどの述べた貪欲な岑守は私財の蓄積だけをめざして人民を苦役に借りだした国司と同列の人物ではありませんでした。崩れゆく律令制を何とか立ち直らせようと努力した「良吏」ともいうべき人物でありました。それをよく示すのが大宰府での働きでしょう。

彼は陸奥守を勤め上げた後、近江守などを経て参議（朝議に参加する役職。現在の大臣クラスにあたる。）となりますが、同時に太宰大式（大宰府の次官ですが、實際上の長官）となります。

この地で彼は飢饉や疫病のために道ばたで倒れている人々を救うために続命院（ぞくみょういん）という施設をつくりました。そして、もう一つ大きな働きをしています。

八二三（弘仁十四）年、彼は自ら中央政府に建築し許可をえた公営田（くえいでん）を設置し建築とおりのやり方で実施に移しました。

公営田の建築を岑守がなしたのはなぜでしょうか。岑守が各地の国司となつて目にしたのはさまざまな労役に駆り出される班田農民（口分田を与えられて税を納める農民）の多くが貧窮におちいつて調・庸をおさめる力を失い、そのため、もとの地から次々と逃亡をしていくという状況でした。これは律令に基づく国家

経営の上で致命的ともいえる大きな危機でした。これに対して有効な方法として、この公営田の方式を考え出したのです。

公営田の目的は直接中央にもたらされる税でありながら、その品質の劣化が進むだけではなく、その数量もかなり減少していた調・庸、そして土地税の確保でした。大雑把にその実施内容を述べるならば次のようです。

太宰府はその管理する水田のおよそ六分の一（一万二千町）を公営田とし、六万人ほどの農民に徭役（律令制の税目の一つとしてもうけられた労役）の一環として口分田で割り当てられた田とは別に耕作させました。村里から富裕な有力農民を選んで一町ほどの土地を与える代わりに正長として公営田に関すること（水田の管理、灌漑設備の整備、耕作の叱咤激励、清算された稲の収納など）はすべて委任しました。もちろん種子・鋤・鍬といった農耕に必要な資材はすべて官が用意しました。さらに徭役に駆り出された農民へは民間の慣行に従って労賃と食糧が支給されています。

この公営田の設置によって税の問題はどうなったでしょうか。

太宰府は公営田から得る全収穫によって徭役に駆り出された農民の租・庸・調のほか、労賃と食糧を清算、そして水路や官舎の修理料をも支出しました。そして、巨大な残額のすべてを国庫の収入としました。この莫大な収入をもとに国

司は品質の良い布など本来は調・庸で納められるべき品物を大量に確保して中央に送ることができたはずで。

この方法は想定以上の成果をあげたらしく当初は四年間に限つての試行ということでしたが、その期限が大幅に延長されました。

この公営田の試行はそれまでの律令制の大枠を大きくかえていく先鞭を付けたものだったといわれています。それまでの税制は一人一人の農民に課せられたものでした。いわゆる人頭税というものです。一方、小野岑守が試行した公営田は土地に対して税を課すものです。この方法は徐々に全国に広がっていき、班田収受は十世紀初めに実施が予告されたにもかかわらず結局は実施されなかったのを最後に以後歴史から完全に姿を消します。時代は律令制の時代から王朝国家体制（律令制の崩れた後の平安時代の国家体制のこと）といわれる時代へと変化していったのです。

残念ながら太宰府時代の岑守の作品は筆者の見え範囲ではありませんでした。嵯峨天皇に愛された漢詩人であり、有能な良吏でもあった小野岑守は八三〇（天長七）年の四月十九日に死去しています。享年は五十三歳。一説ではある儀式の場で長時間にわたって朝堂に立ち続けた疲労が災いして病を發し、それがもとで亡くなったとか。

それは岑守の子である小野篁にあっては二十七歳の時のことでした。

### 【補足】

#### 「日本靈異記」のいとは

この「芥川たより」誌上で六十回近く「今昔物語」の紹介がなされているので、本誌の読者の皆さんにとって「今昔物語」はすでになじみのある説話物語となっているのではないだろうか。しかし「今昔物語」よりも四〇〇年ほど昔に書かれた「日本靈異記」となるとその書名を知っておられるだけでも上々というべきではないだろうか。筆者から見ても文学的な達成度は逆立ちしても「今昔物語」にはかなわないと思わざるを得ず、一般的な読者などはまず望むべくもない作品であることは認めざるをえない。語られる話のほとんどすべては仏教に関わる説話であり、その語り口は「素朴」の一語に尽きるが、黎明期の物語が持つ魅力があるのも否定できない。しかし、それ以上にこの説話集が重要なのは古代の正史や古文書からは見られない一般の人々の姿が描かれていることである。二、三の例をあげてみよう。

讃岐国美貴郡の郡司の妻広虫女（ひろむしめ）は人々に出挙で稲を貸すときは小さな升で貸し徴収するときは大きな升で返させた。このため人々は家

を捨てて他国に放浪した。この罪によつてこの妻は牛と化した。（下巻二十六）

今でもありそうな郡司の妻のあくどいやり方は「出挙（稲の強制貸し付け）」がなされる場ではあちこちで見られたに違いない。こうしたことによって浮浪人となった農民を捜し集めて労役に（たぶん奴隷同然に）使つて調・庸の税を納めさせていた越前国の役人も「靈異記」には登場する。

また、調・庸という税は納税者が自前で都まで運ぶのが原則である。宿泊施設のない時代のこと、野宿するか、せいぜい寺に宿るほかなかった。そして、旅先で病気になることも薬はなく、また持参した食糧が尽きれば餓死するほかはなかった。たとえば、下巻二十八に次のような話がある。

紀伊国の貴志寺に一人の僧が住んでいたところ、夜うめき声がしたので、僧は旅人が急病になって泊まっているのではないかと思つて捜してみると、寺に安置されていた仏像が大きな蟻の群れに頸を噛み砕かれて出した声であつた。（下巻二十八）

これは旅の途中で倒れた人が多くいた当時の時代相をうかがいえる話といえる。

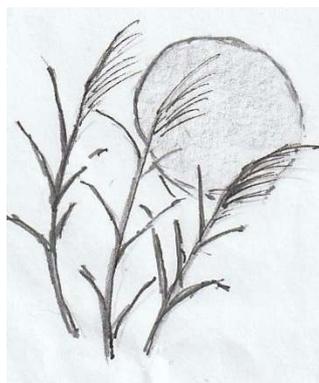
最後は「万葉集」の「防人歌」で有名な東国の防人に関わる話。防人の任期は三年だが、それより長くなるのはざらであつた。農業の主たる担い手である壮年男子が徴発されるのは一家にとつて苦し

いことだが、愛する妻を置いて出ていく夫も辛かつた。それで起きた話。

武蔵国多磨郡の人、火麻呂は防人に行かねばならなくなったが妻と別れることには耐えられず、母を殺して喪に服し兵役から逃れようと思いついた。そこで母をだまし「山の中で法華経を説く法会があるので聞きに行こう」と母を連れ出し山の中で殺そうとした。母を殺そうとするその刹那、大地が裂けて火麻呂は裂け目に落ちて死んだ。（中巻三）

ここには母を殺しても兵役を拒否したい東国の人の感情の一面が反映されているといつてよい。

また、おもしろいことにこの話の末尾で「不孝の罪の報いはすぐにやってくる」と作者はいつていても「妻か母か」と思う東国の人の気持ちには無頓着で語ることは一切ない。そこが「靈異記」の語り未熟なところであり、素朴で妙な魅力があるという所以でもある。



満田正賢

記紀は応神五世の孫とされる継体が前々天皇・仁賢の娘(前天皇武烈の姉)である手白香皇女を皇后に迎え、その間に生まれた欽明を安閑・宣化の後に即位させることによって、天皇家の系譜の継続性を描いています。天皇家の系譜の中で欽明天皇は重要な存在です。しかし、欽明の後、敏達・用明・崇峻・推古と続く欽明の子達の兄弟(妹)相続は多くの異常性をもっていきます。今回は日本書紀の記述に沿いながら、一部古事記の記述との比較も交えて欽明―推古期の系譜の異常性をクローズアップします。

まず欽明の妃は三つのグループに分かれますが、それぞれのグループの記紀の記述には不明な点を含んでいます。第一のグループは、前天皇・宣化の娘達です。このグループは欽明とは異母兄弟の娘(姪)という関係になります。皇后となった石姫は敏達以下三人の子をもうけています。次の稚綾媛(わかやひめ)皇女は一人の子(石上部皇子)をもうけていますが、稚綾媛皇女は古事記では「倉の若江王」という皇子(男子)となっています。その次の日影皇女は一人の子(倉皇子)をもうけてい

ますが、宣化紀には日影皇女という名の皇女は出てこないと日本書紀自身が記しています。

古事記では石姫の妹である小石姫皇女が欽明の妃となり「上王」をもうけていますので、古事記を基準にすると、日本書紀は小石姫皇女の存在を消して稚綾媛と日影皇女を創作した形になります。

第二のグループは、蘇我稲目の娘達です。姉の堅塩(かたし)媛は用明、推古以下十三人の子をもうけています。参考までに子沢山の天皇とその妃を拾いだしますと、日本書紀は、景行が八坂入媛との間に十三人の子をもうけ、景行の子総計八十人が日本全国に散らばったと記しています。古事記では八坂入媛との間の子は四人ですが、景行の子は名前を記した二十一人以外に五十九人おり総計は同じく八十人と記しています。景行紀は九州征伐譚や日本武尊伝説などが含まれており創作されている可能性が強いと考えられているものですが、もし堅塩媛が実際に十三人の子を生んでいたとすると、景行紀・八坂入媛の十三人の子はそれをモデルに創作されたのかもしれない。欽明の子の総数の二十五人は歴代天皇の中で突出したものではありませんが、妃が六人いる中で堅塩媛が十三人もの子を産み続けたというのは特異なことです。

次の小姉君は崇峻以下五人の子をもうけています。日本書紀は小姉君を堅塩媛の同母妹と記していますが、古事記では小姉君は堅塩媛の姨となつています。前記の二つのグループに属さないのが春日日抓(ひつめ)臣の娘である糠子(あらこ)で二人の子をもうけています。古事記では日影皇女の子(倉皇子)がおらず、糠子に三人目の皇子(宗我倉王)がいたことになっています。宗我倉王という名前からは蘇我氏に養子に出したということが想起されますが、日本書紀はその存在を隠蔽しているかのようです。日本書紀のこの一連の系譜の紹介には「異説多し」という注釈が加えてありますが、真実を把握できていないか真実を知らながら真実の隠蔽を図っているかのどちらかでしょう。

次に欽明の子達の異常な兄妹婚の話に移ります。日本書紀は、敏達は皇后広姫(息長真手王の娘)が死んだ後に豊御食炊姫尊(とよみけかしきやひめ)(推古)を皇后に立てたと記しています。敏達と推古は異母兄妹であり、後述しますがこの婚姻は異常です。又、先妻の広姫が三人の子をもうけて亡くなったあと後宮に入った推古が七人の子を生んだことも特異なことです。敏達と推古の婚姻はその後に続く異常な異母兄妹婚の出発点となっています。敏達と推古の婚姻を契機として、その

後異母兄妹婚が頻発します。まず用明と泥部穴穂部(はしひとのあなほべ)皇女の兄妹婚です。用明と泥部穴穂部皇女も父は同じ欽明ですが、用明の母(堅塩媛)と泥部穴穂部皇女の母(小姉君)は日本書紀に従えば同母姉妹であり、この婚姻は血縁的には異母兄妹婚より同母兄妹婚に近いことになりました。その間に生まれたのが厩戸皇子(聖徳太子)です。

厩戸皇子自身も敏達と推古の娘であり叔母にあたる菟道貝鮪(うじのかいだこ)皇女を妃にむかえています。敏達と推古の間には七人の子が生まれていますが、その一人である小墾田(おわりだ)皇女は敏達と広媛の子である押坂彦人大兄皇子の妃となっています。これも異母兄妹婚ですが、この例では二代に渡って異母兄妹婚が続くことになります。押坂彦人大兄皇子と糠手媛(あらてひめ)皇女も同じく異母兄妹婚です。いずれも父は敏達で、糠手媛皇女の母は伊勢の大鹿の首・小熊の娘(菟名子夫人)です。この間に生まれたのが舒明です。なお、敏達紀には敏達と推古の子であり舒明の叔母に当たる田眼皇女と舒明との婚姻が記されていますが、舒明紀には記されていません。日本書紀は、この時期の婚姻外の兄妹間の交わりも記しています。欽明の娘であり伊勢の斎王となっていた磐隈

皇女（母は堅塩媛）が欽明の子である茨城（うまらぎ）皇子（母は小姉君）に犯されてその任を解かれたと記しています。この二人も血縁的に同母兄妹に近い関係です。また、敏達の死後泥部穴穂部（はしひとのあなほべ）皇子（父は欽明、母は小姉君）が推古を犯そうとしたが失敗したという記事もあります。この二人も同様に血縁的に同母兄妹に近い関係です。

ところで古代でも異母兄妹間の婚姻は極めて希ですが、過去の天皇家の系譜の中では、欽明―推古期と同様の異常な婚姻関係が仁徳期に生まれています。

仁徳期の異常な婚姻関係のスタートは、仁徳が自分に皇位を譲るために自殺した異母弟菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の「同母妹の矢田皇女を後宮の敷に連れてほしい」という遺言を受けて皇后磐之媛の怒りを受けながら矢田皇女を妃とし、磐之媛の死後皇后に立てたという記事です。しかしこの記事には疑問があります。仁徳の母は皇后仲姫である一方、菟道稚郎子の母は妃の一人・日触使主（ひふれのおみ）の娘であるからです。庶子であり仁徳より年下である菟道稚郎子が嫡子の仁徳を押しつけて皇太子となっていたことと自体が疑わしいのです。古事記には菟道稚郎子が皇太子であったという記述はなく、もちろんその自殺と遺言話

もありません。但し古事記は仁徳が異母兄妹である矢田皇女と共にその妹の菟道稚郎女も妃に迎えた」と記していません。

仁徳は、同じく異母妹の雌鳥皇女も妃に迎えようと画策します。しかし、雌鳥皇女は仲立ちを頼んだ異母兄弟の準別皇子に横取りされてしまいます。準別皇子と雌鳥皇女も異母兄妹です。

仁徳紀は仁徳を高徳の人物であったと記していますが、異母妹の矢田皇女を無理矢理妃とし磐之媛の死後皇后に立てた、その後も異母妹を次々に妃にしようとした、という過去に前例のない行為を隠蔽する手段として、菟道稚郎子の自殺と遺言話を創作したのではないかと疑いが浮かんできます。

なお、仁徳の子の履中も皇后黒媛が亡くなったあと異母兄妹の草香幡梭（くさかのほたび）皇女を新しい皇后に迎えた」と記されています。しかしそれは古事記には記されておらず、又、同じ日本書紀の雄略紀には特に事情も記されず雄略が叔母の草香幡梭皇女を皇后に迎えた」と記されていますので、履中紀の編者の錯覚である可能性があります。

叔母・姪との婚姻に対象も、日本書紀に記されている限りでは、欽明以前の例は三例だけです。

最初の例は第二代の綏靖が叔母の五十鈴依媛を皇后に立てた例です。但し古事

記はこの婚姻を記しておらず、逆に神武の長男・手研耳（たぎしみみ）命が神武の死後庶母の五十鈴媛を妃にしたという記事が残っています。古事記と日本書紀のどちらかが事実を誤って伝えています。第二の例は第六代の孝安が姪の押媛を皇后に立てた例です。第三の例は景行の子である小碓命（日本武尊）が叔母（垂仁天皇の皇女）である両道入姫（ふたじいりひめ）皇女を皇后とした例です。その間の子が仲哀です。

次に記紀ある特異な婚姻例を紹介しましょう。まず第九代の開化が父孝元の妃・伊香色謎命（いかがしこめのみこと）を皇后に立てた例です。先に挙げた古事記の手研耳命と五十鈴媛の例も同様の例です。さらに、安康が大草香皇子を殺害してその妃の中蒂（なかし）姫を奪い取り、連れ子の眉輪（まよわ）王に復讐されたという例があります。しかしこれらの例はモラルの問題はべつにして血縁的に問題があるわけではありません。

允恭紀には有名な皇太子の木梨軽皇子と同母妹の軽大娘皇女の近親相姦記事があります。この記事をみると同母兄妹婚がタブーであったことがわかります。

仁賢紀には、唐突に「母にも兄、吾にも兄」である夫が高麗に行ったことを哭く女人の話が出てきます。その女人と夫との関係は複雑ですが、要約すると、その夫女人とは異母兄妹であり、又その夫は、その女人の実母と異父兄妹であると

いう内容です。そこでは異母（父）兄妹婚自体はタブーとして扱っていませんが、なぜこのような話が唐突に日本書紀の中に現れるか全く不思議な記事です。

以上過去の例を紹介しましたが、発生日度合いから見て欽明―推古期の一連の異母兄妹婚は明らかに異常です。前例となつた仁徳の異母妹に対する執着は確かに異常なものです。仁徳の個人的な性格とも見えます。そして日本書紀には仁徳の非難されるべき行為を美談に粉飾した形跡がうかがえます。仁賢紀に挿入された「母にも兄、吾にも兄」のエピソードは、欽明―推古期の異母兄妹婚の多発の異常性を覆い隠す為、過去のものと異常な話を挿入した（あるいは創作した）という意図が感じられます。

欽明―推古期の近畿天皇家系譜が事実である場合、このような異常な異母兄妹婚は、天皇家と蘇我氏の二つの血筋の結合と純化という結果をもたらしています。蘇我氏の一族で同時に皇族の資格をもつ女性である推古が異母兄妹婚という異常性を無視して敏達の皇后に据わりました。その後、用明・崇峻・推古というそれぞれ蘇我氏の血筋を受けた人物が皇位を継承しました。そこには明確に蘇我氏（蘇我稲目）の意図が感じとれます。

又、これだけ多くの近親婚が絡み合っているならば、遺伝的な問題（障害）が発生した可能性が強いですが、記紀はそれをいっさい記さず、むしろ血の純化に

より「聖徳太子」という神童・天才が生まれたという話だけをクローズアップしています。その記述はありのままを素直に記しているとは受け取りがたい内容です。

欽明―推古期の近畿天皇系譜のすべてが創作されたものとは思われませんが、その一部が創作された可能性はあります。記紀に共通する系譜の一部が創作である場合、記紀に共通する架空の近畿天皇系譜を作った人物がいたことになり、日本書紀によれば、始めて天皇家の系譜をまとめた書物は六二〇年(推古二八年)に聖徳太子と蘇我馬子が編纂した「天皇記」です。蘇我稲目の血筋は舒明の皇位継承によって近畿天皇家の系譜から途絶えますが、古事記は推古記で終わっているため、天皇の系譜が蘇我氏から離れた事実を伝えていません。欽明―推古期の近畿天皇系譜が創作である場合、架空の近畿天皇系譜を創作したのは蘇我馬子であり、それを記したのが「天皇記」であるという可能性が強いと思われる。欽明―推古期においては、近畿天皇家の系譜が事実であるにせよ創作であるにせよ、近畿天皇家を含めた近畿勢力の中での蘇我氏の存在感と重要性は明らかです。又、欽明―推古期の異母兄弟婚は当事者の意思というよりも蘇我稲目が画策した政略結婚であろうと考えられますが、一方、仁徳期の兄妹婚には性格的な異常性が見て取れます。欽明―推古期の政略

結婚としての兄妹婚は、仁徳期の異常な異母兄妹婚を一種の免罪符として強行されたのではないのでしょうか。

### 道をゆく (3)

#### 成瀬和之

### 「山の辺の道」(3)

狭井神社から北へ進むと、左手に神武天皇聖蹟の石碑が立っています。神武天皇がここに行幸したというのです。「日本書記」によれば、神武天皇は初代天皇とされ、紀元前711年に生まれ、前660年に即位し、前585年に127歳で崩御したと伝えられています。しかし、それは日本では縄文時代に当たり、神武天皇が実在したはずがありません。公式に「天皇」という称号が使われたのは、紀元681年に天武天皇が編集を命じ、689年に持統天皇が施行した飛鳥浄御原令が最初です。

柿の木畑の中を歩いて行く玄武庵です。平安時代の高僧・玄賓が天皇から厚い信頼を得ながら、俗事を嫌って三輪山の麓に隠棲したという庵の跡です。玄賓が三輪明神の化身と出会う話の謡曲「三輪」の舞台として有名です。

玄武庵を経て、山際の細い道を行くと

檜原神社に出ます。檜原神社は、大神神社に付属する摂社で「元伊勢」と称されます。天照大神が伊勢に鎮座する前の社があったと言われます。現在は山中の磐座(いわくら)を御神体とし、三輪鳥居(三ツ鳥居)が神域と人間界を区切っています。

説明板には『第十代崇神天皇の御代、それまで皇居で祀られていた「天照大神」を皇女豊鍬入姫命に託して、ここ檜原の地に遷し、お祀りしたのが始まりです。その後、大神様は第十一代垂仁天皇25年に永久の宮居を求め各地を巡行され、最後に伊勢の五十鈴川の上流に御鎮まり、これが伊勢神宮(内宮)の創祀といわれる』と書かれています。

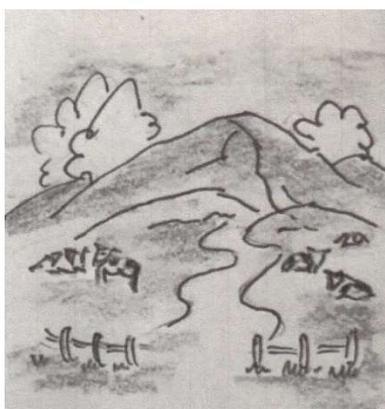
天皇にかわって大神に仕える斎王の初代が豊鍬入姫命とされるわけです。もっとも、先に述べたように、「天皇」の呼称は第四十代とされる天武天皇の頃からですから、それ以前の「大王」(おおきみ)の時代、それも「神話の時代」の話になります。ちなみに、崇神天皇は、「古事記」によれば168歳、「日本書記」によれば120歳で崩御したことになります。その子である垂仁天皇は、在位99年に崩御したことになります。

檜原神社の鳥居から西を望むと彼方に二上山が浮かび、夕景の絶景スポットとして有名です。

二上山はラクダのユブのような形をした、美しい双耳峰です。右側の雄岳の山

上には大津皇子のお墓があります。大津皇子は天武天皇の皇子でしたが、天武天皇の死後1ヶ月も経たないうちに、謀反の罪を着せられ24歳で処刑されました。皇子の姉、大伯皇女(おおくのひめみこ)は数か月後に皇子の死を悼んで「うつそみの 人にある我れや 明日よりは 二上山を 弟背(いろせ)と我れ見む」という歌を万葉集に残しています。大伯皇女は14歳から伊勢神宮の斎宮となり、既に10年余り経っていました。壬申の乱で大友皇子を退けて大海人皇子が天武天皇となったことも考えあわせると、古代天皇制における「王位継承」は「殺し合いの歴史」という一面もあったのです。

黄昏の訪れを待つ二上山に沈む夕日を眺めたいところですが、JR桜井線巻向駅へ向かうことにします。なお、邪馬台国の女王卑弥呼の墓という一説もある箸墓古墳はJR桜井線の反対側すぐのところにあります。



## 「我がおくのほそ道の旅」その後2

### 成瀬和之

#### 金福寺と芭蕉・蕪村

与謝蕪村は摂津国東成郡毛馬村（現在の大阪市都島区毛馬町）に生まれました。では、蕪村のお墓はどこにあるのでしょうか？

京都の東山山麓、一乗寺の金福寺（こんぶくじ）にあります。

金福寺は、もと天台宗のお寺でしたが、後一時荒廃し、江戸時代中期に鉄舟和尚が再興し、臨済宗南禅寺派のお寺となり、今日に至っています。

元禄の昔、松尾芭蕉が山城国（京都）を吟行した時、金福寺の草庵で閑居していた住職の鉄舟和尚を訪れ、風雅の道について語り合い、親交を深めました。その後、和尚は、それまで無名であった庵を「芭蕉庵」と名づけ、芭蕉の高風をいつまでも偲びました。

芭蕉の死後22年して蕪村は生まれましました。42歳の時、京都で「与謝氏」を名乗りそして結婚、一人娘をさずかります。京都で家庭生活を送ったのです。

その蕪村が61歳の時に、金福寺を訪ねて来ました。その頃すでに庵は荒廃していました。近くの村人たちは、ここを「芭蕉庵」と呼びならわしていました。

芭蕉を敬慕していた蕪村は、その荒廃を大変残念がり、庵を再興し、俳文「洛東芭蕉庵再興記」をしたため金福寺に納めました。この俳文は含蓄のある格調高い名文として知られ、俳文学の教材にもなっています。

1781年、蕪村が66歳の時に、芭蕉庵は落成しました。その時、「耳目肺腸ここに玉巻く芭蕉庵」という句を詠みました。「芭蕉の開いた蕉風俳諧を尊敬するわれらの身も心も、この芭蕉庵に込められていて、玉巻く芭蕉が、やがて広葉をひらくように、同志たちの俳諧の将来も洋々たるものがあるう」という意味です。

蕉風復帰、俳諧中興の意気込みと庵が落成した喜びの気持ちを表しています。蕪村はまた、芭蕉庵の横に芭蕉の生涯を称えた碑を建て、「我も死して碑に辺（ほとり）せむ枯尾花」と詠み残しました。

その2年後の12月25日、蕪村は68歳で亡くなりました。そして、蕪村の望みどおり、芭蕉の碑の後ろの丘に蕪村の墓がつくられ納骨されました。京の東山の麓に芭蕉を慕った蕪村は眠っているのです。

本堂には、蕪村が64歳の時に描いて寺に奉納した芭蕉の肖像画、「奥の細道絵巻」（大阪府池田市逸翁美術館蔵）の複製なども展示されています。

また、金福寺には静かな枯山水の庭園があり、蕪村のお墓の辺りからは、京の街が西方に見下ろせ、はるか遠方には愛

宕山まで見ることが出来ます。高浜虚子は「徂（ゆ）く春や京を一目の墓どころ」と詠んでいます。

金福寺は芭蕉と蕪村にゆかりのある、ひそかな「俳句の聖地」となっています。この寺のすぐ北には、親鸞が一時修学したところのある北山別院、「ししおどし」のある庭園で有名な詩仙堂もあり、京都散策の一コースとしてお薦めです。

#### 編集後記

その場の雰囲気を感じて言動を合わせるのを「空気を読む」という。職場や友人らと話すときも空気を読んで意見を言うのが常識になっている。

しかし、この常識は非常に危険な習慣を助長する。自分で考えて自分の意見を言う事をしなくなるからだ。似たような意見ばかりを言う思考停止の状況になっても異常だと感じなくなる。社会構造に対する提案など、生きていくための根本的なシステムについての論議はよほどの合った人としかしくなる。そして段々としなくなる。

自己責任という詭弁でもって政治の貧困を覆い隠す時の為政者にまんまとやられるのである。この調子でいけば、ほとんどの人が自分の意見を考えなくなり、言うこともなくなるかもしれないが、唯一残された秘密の道がある。それは選挙だ。周りの人たちと調子を合わせたふりをしながら、自分だけの一票を投じる。

この行為は、言わなければ誰にも分らない。本当の自分の意見を表現できる機会である。この意味は非常に重い。これすら放棄するならば、もはやロボット化した人間と言わざるをえない。

## しゃべり捲れ

私は、大抵は穴の中から黙って外を見ている。外と言っても水の中のことであるが、普段訊ねて来る友もないからだんだんと無口になる。一日中黙っていても別段苦にならない。しかし、かつて「しゃべり捲れ」と叫ぶように詠った詩人がいた。そうだ、美しい国の言葉を圧殺し、無力化し、意味を持たない記号のよな音を口から吐き続ける政治家が我が物顔に横行するのを、このまゝいつまでも黙って見ている訳にいかないだろう。私も私に言おう。「しゃべり捲れ！」と。

しゃべり捲くれ

小熊秀雄

私は君に抗議しようといふのではない、

—私の詩が、おしゃべりだといふことについてだ。

私は、いま幸福なのだ舌が廻るというふことが！

沈黙が卑屈の一種だといふことを私は、よつく知つてゐるし、沈黙が、何の意見を表明したことにともならない事も知つてゐるから—

私はしゃべる

若い詩人よ、君もしゃべり捲くれ、我々は、だまつてゐるものをどンドン黙殺して行進していふ

気取つた詩人よ、

また見当ちがいの批評家よ、

私がおしゃべりなら君はなんだ、

君は舌足らずではないか、

私は同じことを

二度繰り返すことを怖れる、

おしゃべりとは、それを二度三度四度と繰り返すことを云ふのだ、

私の詩は読者に何の強制する権利ももたない、

私は読者に素直に

うなづいて貰へばそれで

私の詩の仕事の目的は終わった。

私が誰のために調子づき、君が誰のために舌がもつれてゐるのか、

若し君がプロレタリア階級のために舌がもつれてゐるとすれば問題だ、

レーニンは、うまいことを云つた、

—集会で、だまつてゐる者、そ

れは意見のない者だと思へ、と

誰も君の口を割つてまで

君に階級的な事柄を

しゃべつて貰はうとするものはないだらう。

我々は、いま多忙なんだ、

—発言はありませんか

—それでは意見がないと見て決議をいたします、だ

同志よ、この調子で仕事をすゝめたらよい、

私は私の発言権の為に、しゃべる。

読者よ、

薔薇は口をもたないから匂ひをもつて君の鼻へ語る、

月は、口をもたないから

光をもつて君の眼に語つてゐる、ところで詩人は何をもちて語るべきか？

四人の女は、優に一人の男をだまりこませる程に

仲間の力をもつて、しゃべり捲くるものだ、

プロレタリア詩人よ、

我々は大いに、しゃべつたらよい、

仲間の結束をもつて、仲間の力をもつて敵を沈黙させるほどに壮烈に—。

## 俳句

土田 裕

夏めくや水底走る魚の影  
一蹴りで水面騒がすあめんぼう  
さよならを背中が告げる白日傘  
異国の娘(こ) 背丈に足りぬ宿  
浴衣  
大寺に鳴き声しきり黒鵜(つぐみ)

影山 武司

サンダルの鼻緒の朱色卯波立つ  
浜へ行く道の標や立葵  
白燈台ぬつと立ちゐる青岬  
群青の渦の巻きくる夏怒濤  
若楓葉の先ごとの雨雫  
捕虫網の網のみ見ゆる木の間かな  
夏シャツの皺を叩きて空に乾す  
枇杷の実の空に熟れたる黄金色  
黒電話の真中占めたる夏館  
麻服の袖折り返し水掬ふ